

発心集序文攷

山口眞琴

はじめに

かつて桑原博史氏は説話集に付された序を概観し、『説話集の中でも往生伝の数々、発心集、撰集抄と続く流れには、内省的なものが共通して存在していることに気づく。』と言及された。¹⁾首肯すべき御指摘であろう。本来、自照性の希薄な説話集にあって、序は最も強く編者の自己主張が投映され得る場であると言えよう。殊に中世の説話集にはその傾向が顕著に認められる。よって、あくまで付属的な部分ではあるが、序自体の検討も編者の思想等を究明する上で重要であると考える。

今日、説話文学研究において、その対象として扱われ、所謂説話集と定義される作品には、多くの場合序が付されている。しかし、説話の宝庫たる『今昔物語集』や『打聞集』『古本説話集』などは序はなく、中世の『古事談』『今物語』等にも見られない。また、

序を有する説話集の中に、明らかに後人の手になる序を付載するものがある。その代表的な例に『宇治拾遺物語』があり、その序には、『宇治大納言物語』の編纂情況およびそれに漏れた話を拾集し、さらに以後の話を採録したという本書成立の経緯が述べられている。²⁾他に説話集の序として特異な性格をもつものに『三国伝記』序がある。ここでは、まず応永初年の執政准三后足利義満の治政を称え、四海平安にして海外との通交の類繁な情況を述べ、折から来朝した天竺の僧梵語坊と大明の俗漢字郎とが東山の清水寺に参詣したところ、偶然に宿願のことあつて参籠していた本朝江州の遁世者和阿弥と同席し、丁亥八月十七夜の月を待つ間の慰めと法楽のためにと和阿弥の提案により三人が巡り物語に及んだことを記している。³⁾その個々の物語が『三国伝記』所収の説話という体裁をとる。編者のこの仮構化によって、序から説話集内部への有機的連関が生じる結果となっている。

同様の例に『宝物集』が挙げられる。本集には序として独立した文章はないが、全体が大きな構想に支えられ、言わば序的部分なるものが存する。治承四年の春、嵯峨の御堂にて財宝論議が展開され、その結果仏法を宝とする僧と若い女房との問答にまで及んだ、というのがそれに当る。この構想により所収説話は当座で説かれる法談の例証話としての性格を帯びることとなる。ちなみに、本集の問答聞書形式は古く「大鏡」等に見い出せる。また、独立した形ではなく、説話集内部に序的文章を指摘し得るものに「閑居友」があるが、これについては後述するので詳細は略したい。

このように見てくると、説話集の序にも種々の様相のあることが判る。本稿では「発心集」序を中心に据える関係上、右に掲げた以外の主要な序との対比をもとに、「発心集」序の特色等を考えていくことにする。尚、説話集の進化に伴う序の変化については、桑原氏によって既に論述がなされているので、そちらを御参照願いたい。

一、中国仏教説話集の序

本朝説話集の序と「発心集」序との対比検討の前に、本朝説話文学に多大の影響を及ぼした中国仏教説話集の序の幾つかについて触れてみたい。まず、「日本霊異記」にその名が見え、本集編纂の指針ともなった「冥報記」と「金剛般若経集驗記」の序を取り上げる。

「吏部尚書唐臨撰」と記された「冥報記」序の冒頭には、

夫含氣有生。無不有識。有識而有行。隨行善惡而其報。如農夫之播種。隨所植而收之。此蓋物之常理。固無所可疑也。

と、因果応報の考えが説かれている。更に、「比見衆人不信因果説見雖多。同謂善惡無報。」と当時の人々が因果応報の理を信じなくなつたのを嘆き、その理由として自然説・滅尽説・矛盾説の三点を掲げている。これに対し唐臨は現報・生報・後報の存在を提示し、「於此三報損一切法。」と結んで因果応報説を改めて主張するに至る。以上が本集の基幹をなす思想的背景や編纂の動機を述べた部分と言えよう。以下、本集が「観世音応驗記」や「宣驗記」「冥祥記」を先蹤模範とする旨を記し、最後に、

臨既慕其風旨。亦思以勸人。輒錄所聞。集為此記。仍具陳所受。及聞見由緣。言不飾文。事專揚確。庶後人見者。能留意焉。

(傍点稿者、以下同じ。)

という編纂意図や編述方針を明らかにしている。ここに教訓的意図の存することは贅言を要すまい。但し、本集の組織構成および「冥報記」の名の由来については記載がない。おそらく書名は「冥祥記」と因果応報、とにちなんだものと思われる。

一方、唐梓州の孟獻忠によって編まれた「金剛般若経集驗記」は、その序から「大唐開元六年歲次戊午四月乙丑八日」に編纂が完了したと判明する。序にはまず、

夫般若者。乃諸仏之智母。至道心之精微。為法海之泉源。実如来之秘藏言語道断。心行処超於名相。

と、金剛般若經の優性が記されている。次いで、『今者取其靈驗尤著異跡。剋彰經典之所伝。耳目之所接。集成三卷分爲六篇。』という編述方法や組織構成についての記述が見える。即ち、金剛般若經の靈驗譚を經典や見聞した事蹟から収集し三卷六篇としたのが本集というわけである。更に序には、『雖不足發揮聖教光闡大乘。庶胎諸子孫以勵同志』という編纂意図も示され、『金剛般若經靈驗記』『冥報記』『冥報拾遺』に材を求め、それらを出典とすることが明記されている。

右の両序は編纂に際して影響を受けた書物を明示している点で共通し、積極的に他を教導せんとする意図を有する点でも一致した。次に『今昔物語集』の出典説話を数多く所収する『経律異相』『法苑珠林』の序を見る。

『経律異相』序の冒頭には、

如来応跡投縁。隨機闡教。兼被龍鬼。匪直天人。化啓僑陳。道終須跋。文積巨万簡累大千。自西徂東固難得而究也。若乃劉向校書。玄言久蘊。漢明感夢。靈証弥彰。

と、仏教功德の絶大なることが説かれ、次いで、それに伴う『三蔵』（經典）の豊富さと『皇帝』（梁の武帝）の威徳による仏教弘通のさまが記されている。また、本集編纂の経緯については、

以天監七年。勅釈僧旻等。備鈔衆典。頭証深文控会神宗。辞略意賅。於鑽求者已有大半之益。但希有異相猶散衆篇。難聞秘説。未加標頭。又以十五年末。勅宝唱鈔経律要事。皆使以類相從。

令覽者易了。

とある。ここに經典等にある異相・要事・秘説を専ら類別集成するという方針が窺える。更に、本集の組織等の記載も見え、結びには『将来学者。可不劳而博矣。』とある。従って、先行する経律鈔録の書を補足し、後の学者のために便益の書たらしめんとした点に編纂意図を求めることができよう。

『法苑珠林』は『西明寺沙門釈道世』によって編まれた仏教の大類纂書である。但し、その序は自序ではなく、『朝義大夫蘭合侍郎隴西李儼字仲思』の付したものである。総じて讚辞に終始しているのは言うまでもない。が、その中で特に注目すべきは次の編纂の動機および方針に関する記述である。

三蔵遍覽。以爲古今綿代。制作多人。雖雅趣佳詞。無足於博。記所以纂文囿之菁華。嗅大義之瞻蔔。以類編録。

つまり、先行の諸経論等は美文ではあるが、広く一般的な事柄を網羅する点に欠けており、その不足を補うべく百般の事項を類集し個々の意味を明らかにする、というのである。他の部分にも内容重視の方針が強調されている。『経律異相』序にも認められたことではあるが、先行類書の批判を通して成立の所以を述べている点に留意したい。敢えて言えば、序において編纂の動機を提示する際の類型がそこにあるように思われる。即ち、『冥報記』『金剛般若経集驗記』を先行書追従型とすれば、『経律異相』『法苑珠林』は先行書批判型とでもできようか。これに関して本朝説話集の場合で言えば、

『発心集』は後者に、『日本靈異記』や『日本往生極楽記』をはじめとした往生伝類は前者に該当するであろう。

以上、まことに大ざっぱながら中国仏教説話集の序を幾つか概観した。その他、『三宝感応要略録』序は比較的簡潔ではあるが、編纂の意図や方針および組織構成についての記述はなされてい。結果、記述内容はもちろん異なるが、序に記載されるべき事項はおのずから明らかになったと思われる。これをもとに作成したのが主要本朝説話集序の対照表（別表）である。

二、「発心集」序の特色

対照表を通覧してまず気付くのは、『発心集』序に集の組織構成や成立時期および書名の由来といった事項の記述が全く見られないことである。⁽⁸⁾当然の如く、このことが『発心集』の原態、成立時期等の問題に疑問を残す原因となっている。編者・長明が意識して記さなかったのか、それとも記す必要性を感じなかったのか、判断しかねるが、精粗の差こそあれ、中国・本朝のほとんどの説話集序がそれらの事項を記しているのを考えた時、やはり釈然とせぬものを覚える。とりわけ編述方針については具体的且つ詳細に記していることから、然るべき理由が存したのではないかと予想される。

説話集の序がいつ執筆されるかについては種々の意見があろうし、またいつ書かれても差し支えない性質のものであろう。ただ、

『金剛般若経集験記』や『三宝絵』などのように編纂完了時期を明記している序は確実に集成立後執筆されている。また、大部な組織に基づいて編まれる説話集の場合、ある程度全体の構想が定まり集組織が確立してから、序が付されると見るのが妥当であろう。従って、『発心集』序に組織等の記述が欠けているのは、編纂過程の比較的早い時期か、あるいは何次かの編纂過程のうちの初期段階に序が書かれた可能性を強くさせてくれる。少なくとも序執筆の時点で『発心集』は未定稿であり、以後増補され書き継がれていく段階にあったと思われる。⁽⁹⁾

次に、説話集全体のあり方とも関わる編纂意図が序にどのように示されているかを対比検討してみたい。

本朝仏教説話集の先駆的存在である『日本靈異記』の序は、前節の中国仏教説話集の序を最もよく踏襲していると思われる。そこには善悪の現報する靈異、つまり因果応報によって生じる幾多の奇異な話を実例として、因果応報の現世にある衆生をして善道へ導かんとする編纂意図が示されている。しかも、『匪呈善悪之状、何以直於曲執而定是非。匪示因果応報、何由改於惡心而修善道。』のように強い口調で衆生教化の意図が打ち出されている。

序に記された編纂意図において『日本靈異記』と同傾向を示すものに、『十訓抄』『私聚百因縁集』『沙石集』がある。『十訓抄』序には、年少者に対する教訓を意図した旨が明らかにされている。年少者を対象に『吉き方をばこれをすすめ、悪しき筋をばこれをい

別表

十訓抄	発心集	三宝絵	日本霊異記	
世人「品をわかつ賢は徳おほく、愚なるは失おほし」という現実。	不安定な心を持つ我等にとって仏の所説は利益少ない。	厭世出家の重要性。仏法功德の絶大さ。尊子内親王の出家。	世人の悪業貪心善悪現報の見聞。冥報記・般若験記の影響。	編纂動機・背景
「少年のたぐひをして心をつくるたよるとなさしめんがため。」	賢愚の例により出離解脱の機縁とする。「我が一念の発心を樂しむばかりにや。」	後世引導の仏縁とする。内親王の道心を励まし慰める。	善悪の状・因果の報を示して、衆生を善道に導く。	編纂意図
「昔今の物語を種として、よろづのこと葉の中より。」	「はかなく見る事、聞く事を註し集め」る。	上巻―種々の経文より。中巻―家々の文より。下巻―年中仏事より。	「聊カ側二聞くことを注す。」	収集方法
和文にて「むなしきこと葉をかざらず、たゞ実のためしをあつむ。」	天竺震旦説話・仏菩薩因縁譚を除外。本朝の卑近な話をのみ記す。	仏法功德賞讃譚。	善悪因果譚。	編述方針
「三卷の文として三余の窓にかむとなり。」		「三巻に分てる事は三時のひまにあてたる。」	「上中下の三巻を作して、季の葉に流フ。」	集組織・構成等
「こころみに十段の筋をわかつて十訓抄と名づく。」		「其名を三宝と云事はつたへいはむ物に三帰の縁を令結むとなり。」	「号けて日本国現報善悪霊異記」	説話集名・由来
建長四年冬東山の庵にて。		「于時永観二た年中の冬なり。」	「仏涅槃」より一七二二年経過。 (下巻序)	成立時・所
	「誰人か是を用いん。物しかあれど人信ぜよともあらねば・・。」	卷中すべて善く「三宝伊坐して可守給。」	遺漏多くとも読む者「諸善奉行せむことを」願う。	付記・他

抄 石 集	撰 集 抄	百 因 縁 集	古 今 著 聞 集
「鹿言軟語ミ ナ第一義ニ帰 シ治生産業シ カシナガラ実 相ニ背ズ」と いう立場。	無常の世に悟 り切れぬ自己 の現状。	「万法ノ由来、 諸法ノ因縁、 得法ノ門、開 悟ノ道也。」	音楽・絵画の 諸事逸話の収 集。宇治大納 言物語・江談 抄の影響。
衆生を「仏乘 ノ妙ナル道ニ 入シメ」 「勝義ノ深キ 理ヲ知シメン ト思フ。」	「座の右に置 いて一筋に知 識にたのま む。」 ※「これ閑居 の友にせん。」	「為与我齊小 聞小見之輩。」 ※説教資料作 成。	実録として後 世に伝える。 ※本集を以て 善因とする。
「見シ事聞シ 事思ヒイダス ニ随テ・・・ 書集侍リ。」	「新旧のかし こきあとを撰 びもとめける 言の葉を書き あつめ」る。	「廻管見、聚 経論衆文」	※家々の記録 ・勝絶の探 索、伝聞によ る収集。
「雑談ノ次ニ 教門ヲ引、戯 論ノ中ニ解行 ヲ示ス。」	巻毎に神明説 話収録。詩歌 雑談の収載。	梵(天竺)漢 (震旦)和(本 朝)説話。	中国の経書・ 史書からは採 らず。
「巻八十二満 チ事ハ百ニ余 レリ。」	「九品浄土」 より九巻、話 数は「八十随 好」より八十 話。		「註緝為三十 編。編次二十 巻。」
「彼金ヲ求ル 者沙ヲ集テ是 レヲ取り玉ヲ 斲ブ類ハ石ヲ ヒロイテ是レ ヲ磨ク。仍沙 石集ト名ク。」	「新旧のかし こきあとを撰 び・・・書き あつめ撰集抄 と名づ」く。	「題百法要文、 ・・・名百因 縁集。」	「名ツケテ曰 古今著聞集。」
「弘安第二之 曆三伏夏之天 集之。林下之 貧士無住。」	※寿永二年正 月下旬、讃州 善通寺の方丈 庵にて。	※「時曆正嘉 元丁巳七月中 於常陸集記。」	「建長六年応 鐘中旬・・・ 」
法義を悟り、 因果を弁えて 出離解脱の道 しるべとせ よ。		「学者若シ見 之、刻非作 是。愚者モ亦 開之、捨僻入 直。」	「偏招博識宏 達之盧胡。努 下出蝸虻。謬 比鴻宝。」

※は跋文による補足

ましめ・・・」とあるように、処世の基本姿勢や精神のあり方を教
え諭すために『昔今の物語を種』として編纂したとある。更には、
『むなしきこと葉をかざらずに、たゞ実のためしをあつむ』という
編述方針からも、平易で実用的な教化書としての性格を見ることが
できる。むろん、仏教説話集とは内容的に異なるが、他者への強い
教訓的意図という点では『十訓抄』も同列であるとききよう。

『私聚百因縁集』の場合、序によると、万法の由来や諸法の因縁
が得法開悟の道へ導くという考えに基づき「小聞小見之輩」のため
に編纂したとある。やはり衆生教化の意図が存したと言えよう。これ
をより明確にしてくれるのが本集跋の「但為^ク人演^ニ説^シ令^レ悟^ル因
縁^ノ故^{ナリ}」という叙述である。この叙述から、編者・住信が本集を
説教唱導用の資料テキストとして編んだことが判明し、衆生教化の
意図と共に、「唱導資料」作成というより実際のなねらいを認める
ことができる。

『沙石集』について見ると、説話を通じて『仏乗ノ妙ナル道ニ入
シメ・・・勝義ノ深キ理ヲ知シメン』という編纂意図が序に記され
ている。深遠なる仏教の理を様々な説話によって読者に理解させよ
うとした、まさに啓蒙的な意図と言える。

その他、『三宝絵』は序において、本集を仏縁とし後世引導のた
よりとする意図を明らかにしている。しかし、周知の如く『三宝絵』
は出家した尊子内親王に奉呈するという目的を有しており、序にも
あるように「尊き御心ばへをもはげまし、しづかなる御心をなぐさ

むべき」対他的意図を別にもっている。そして、仏教入門書的性格の
強い面からすれば、むしろ後者の意図の方が有力だったかに思われ
る。また、音楽や絵画に関する逸事の収集を発端として編まれた『古
今著聞集』の序には、実録・記録として残す旨が記されている。そ
の跋文にも『いにしへより、よきこともあしきことも、しるし侍ら
ずは、たれかふるきをしたふなさをのこし侍べき。』とあり、つと
に故事逸話を後世に伝えようとする意図が窺える。やはり、これも
他者を念頭に置いたところに編纂意図があると考えられよう。

さて、『発心集』に目を移すと、その序に示された限りにおいて
対他的な編纂意図を認めることはできない。逆にそれを打ち消すが
如く、『賢きを見ては及び難くともこひねがふ縁とし、愚かなるを
見ては自ら改むる媒とせむ。』とか「我が一念の発心を染しむばかり
にや。』と、あくまで己れ自身のための編纂であると述べている。従
って、『発心集』序に見られる編纂意図は先に触れた説話集のそれ
とは一線を画し、一切の他への働きかけを拒否し自己との関わりに
おいて説話集を編むのだ、という表明自体に注目すべきものがある
う。

対他的意図を示していない例に『撰集抄』序がある。そこには
『おなじ夢の中のおそびにも新旧のかしきあとを撰びもとめける
言の葉を書きあつめ、撰集抄と名づけて、座の右に置いて、一筋に
知識にたのまむ』とあり、『発心集』と同様編者自身の座右の書
として仏道をめざす機縁としたいとする意図が示されている。但

し、現存『撰集抄』には西行仮託の説話集として編まれた複雑な成
立事情があるので、序についても単純に『発心集』と比較して論じ
ることはできないが、編纂意図における共通性をはじめとして両序
の近似度はかなり高い。

他に編纂意図を自己との関わりにおいてのみ明らかにしているも
のに『閑居友』がある。既述したように、『閑居友』には巻頭に付
された序はないが、二回の執筆過程のうちの第一次成立部分と言わ
れる上巻第三話の末尾に序的文章があり、第三話序章説も指摘され
ている。⁽¹¹⁾ その部分には『たゞかやうの人のあとをおもひいでて、し
たひかなしみて心をやすめ侍れば、せめてのむつまじさに記しけれ
侍ぬるべし。』とあり、また上巻第一話の評論部でも梗概説話の引用
意図を『これをはしにてしりそむる縁ともやなり侍らん。』と記して
いる。多くの先人の話を書き記すことによって、彼らと結縁を図り
自己の道心を励まそうとする意図をそれらに見ることが出来る。

もちろん、序に示された編纂意図が実質のそれと完全に一致する
わけではなからうが、桑原氏も述べておられるように、右三集の序
の共通性と、西尾光一氏の説かれる、説話から随筆へ⁽¹²⁾ という展開
における『発心集』から『閑居友』『撰集抄』にかけての随筆的発
想の定着とは無関係ではないと考えられる。その意味からも『発心
集』序は重要な位置を占めているようである。

三、「発心集」序の分析

更に『発心集』序を『撰集抄』序との比較をもとに検討してい
く。まず、『撰集抄』序の前半部分を掲げる。

生死のながきねぶりがまださめやらで、夢にのみほだされつ
ゝ、^①水の面の月をまこと思ひ、鏡の中のかげをげにとふかく
思ひ入て、あけくれは只妄^②の心のみ打つゞきて、生死の舟をよ
そへずして、屠所の羊の歩みは、我身のほかにもてわすれ、鳥
辺船岡のけぶりやよそに見て、過にしかた四十余年の霜をいた
ゞき、行末しらず、けふにしもやあらん。

ここにははかない世に生きながらも、いまだ悟り切れないでいる自
己告白がある。所謂凡愚觀を基調にした述懐ではあるが、多分に随
想的であるとも言える。また、傍点部分①②が末尾の『抑凡夫のな
らひ、明眼めしひて、真月を見ず。心みだれて、断妄の利劍おこらざる
也。』と対応しており、修辭を凝らした跡が窺える。

一方の『発心集』序にも多くの比喻・修辭が見られ、自己の凡愚
性を披瀝する点でも『撰集抄』序と一致する。だが、相違点も認め
られる。即ち、『発心集』序には長明自身の関心の所在、あるいは
問題意識が明らかにされているのである。しかもそれが他の仏教説
話集に見られるが如き三宝礼讚や因果応報等の教説に帰着してい
かない点が特色だと言える。以下、その叙述を追ってみる。

仏の教へ給へる事あり。「心の師とは成るとも、心を師とする
事なかれ」と。実なるかな、此の言。

もはや著名となった冒頭であるが、これからして人の八心Vのあり方に対する長明の問題意識の高さを知ることができよう。続いて八心Vは野鹿のように制御し難い存在であり、そのような八心Vを反省し八心Vを許さず浄土に生まれようとすることは、『牧士の荒れたる駒を随へ遠き境に至るが如し。』であると同喩えられている。この比喩の根底にあるのは、冒頭にある仏の教えに随うべき教訓の意図ではなからう。やはり八心Vは『荒れたる駒』の如く狂暴で不安定であるという認識が根強く支配していると思われる。このことは続く次の叙述を見れば明らかであろう。

但、此の心に強弱あり。浅深あり。且つ、自心をはかるに、善を背くにも非ず、悪を離るるにも非ず。風の前の草のなびきやすぎが如し。又、浪の上の月の静まりがたきに似たり。

この『自心』の分析に、八心Vに対する長明の不信感が看取できようし、不安定な八心Vと『仏の教へ』との乖離が暗示されているとも考えられる。実際に、

我等、仏に値ひ奉らましかば、何なる法に付いてか勧め給はまし。他心智も得ざれば、唯、我が分へのみ理を知り、愚かなるを教ふる方便は欠けたり。所説、妙なれども、得る所は益すくなき哉。

という後続部分に至って、両者の関係は否定されてしまうのである。『発心集』序において終始一貫して変らないのは八心Vがたたく不安定であるという認識であり、これを固定してしまつたところに、

仏の所説は利益少なしとする見解が提出されたと言える。

では、なぜ長明はこのような八心Vの問題を基軸に序を展開したのであるうか。彼自身の問題意識と共に、私は『方丈記』末尾との関連があると考ええる。『閑居の気味』を謳歌した長明は、一転して『仏の教へ給ふおもむき』に背く執心に自ら問いを投げかけるが、もはや『その時、心、更に答ふる事』なく『方丈記』の幕はおろされてしまう。たとえそれが周到なレトリックにしろ、沈黙裡にある自問自責の残響音は読者をその答えへと誘わずにはおかない。解答放棄した長明自身もまたこれに無自覚ではいらなかっただろう。飛躍を恐れずに言えば、その答えとして用意されたのが他ならぬ『発心集』序における八心Vのとらえ方ではなからうか。畢竟、それは遁走的とさえ映る解答であるが、長明にとっては唯一絶対の真理であつたかに思われる。加えて、序冒頭の『心の師とは成るとも、心を師とする事なかれ』⁽¹⁴⁾という仏の教えも、『方丈記』の八心Vの遍歴を通してはじめて長明にとつての重い意味合いを理解し得ると考える。

さて、長明が日野の草庵に持ち込んだと『方丈記』に書かれてある『往生要集』には、次のような『十住毘婆沙論』からの引用が見られる。

仏の所説あるは、皆利益ありて空言ならず。これまた希有なり。(中略)もし仏、衆生を度せんと欲して、言説したまふ所あらば、乃至、外道・邪見・諸竜・夜叉等、及び余の仏語を解せず

る者にも、皆悉く解せしめ、これ等もまた能く無量の衆生を転化す。この故に、仏を最上の導師と名づく。

四の問答の中に於て 超絶して倫匹なし 衆生のもろもろの問難は 一切皆得易し もし三時の中に於て もろもろの所説あるものは、言必ず虚設ならず、常に大いなる果報あり。⁽¹⁵⁾

特に傍点部分の主旨と、『発心集』序の、仏の所説利益少なしと、いう見解との間には明らかに対峙するものがある。一見、大胆とも思える主張に長明が及んだ真意は一体どこにあるのだろうか。もちろん、凡愚な『我等』にとって仏の所説や因縁譚が過分であり、余りにも崇高すぎるといった考えが大きく作用しているのは確かだが、今ひとつは、それらを『我等』にとって効果の少ないものと見做すことにより、『発心集』がそれらに代わる有益な書であることを誇示しようとしたのではないかと予想する。序を見る限り、『所説、妙なれども、得る所は益すくなき哉。』という見解が説話集編纂の直接的動機であり、同時にその有効性を導く役目も果たしていると言えよう。△心Vの絶対性↓仏の所説の非有効性↓本集の有効性、という序の論理構造を改めてここで押さえておきたい。

たとえば、『古今著聞集』や『沙石集』の場合、説話集編述の拠り所を、その行為を以て讚仏乗の因・転法輪の縁とする狂言綺語観に求めている。

。情これらのおもむきを思へば、みな蓮氏の非に似たり。すみやかに三十巻狂簡の綺語をもて、翻て四八相値遇の勝因とせん。

龍言柔軟之文、仏種從縁起之教を此取信といへる事也。(『古今著聞集』跋)

。夫鹿言軟語、ミナ第一義ニ帰シ、治生産業シカシナガラ実相ニ背カズ。然レバ狂言綺語ノアダナルタハブレラ縁トシテ、仏乗ノ妙ナル道ニ入シメ・・・(『沙石集』序)

『白氏文集』「香山寺白氏洛中集記」を出典とするこの考えは本朝の諸書に散見し、⁽¹⁶⁾ 中世期には文芸と仏教とを結ぶ常套的手法として用いられている。しかし、『発心集』序ではこれを探らず、自己のあり方と関わらせて説話集編纂の動機や有効性を説いているのである。但し、類似的先例がないわけではない。慶滋保胤の『日本往生極楽記』序では『上引経論二教証往生事。実為良驗。但衆生智淺。不達聖旨。若不記現往生者。不得勸進其心。』という部分が編纂動機のひとつとなっており、『往生要集』序にも『夫往生極楽之教行濁世末代之目足也。道俗貴賤誰不歸者。但頭密教法其文非一。事理業因其行惟多。利智精進之人未為難如予頑魯之者豈敢矣。是故依念仏一門聊集経論要文。披之修之易覺易行。』とあるように、源信自身の凡愚性が執筆契機に結び付けられている。また、経論・法文の難解さを指摘する点でも『発心集』序に近いものを感じさせる。そこに『発心集』序との等質性は問えないにしても、長明がそれらに見られる伝統を受継した可能性は十分考えられる。

そこで蛇足ともなるうが、誤解を避ける意味で今一度『所説、妙なれども・・・』について付言しておきたい。それは、この見解が

仏教そのものの否定を指すのではないことである。難解な教義を扱うところの仏書や教化書に対する批判の念がそこにあると見たい。自分のためにだけという編纂意図をも考慮すれば、仏教唱導説話全盛の時代であって、他を教化せんとして編まれたそれらに対する強烈な対抗意識が長明にあったと推測する。序後半部の『殊更に深き法を求めず』『誰人か是を用いん。物しかあれど、人信ぜよとにもあらねば、必ずしも、たしかなる跡を尋ねず。道のほとりのあだことの中に・・・』といった叙述の端々にそれは窺えよう。編纂動機を先行書批判を通して述べるのは『法苑珠林』等にも見られたが、『発心集』序のそれはむしろ『三宝絵』や『蜻蛉日記』の物語批判の激しさに近いように思われる。

四、「発心集」編纂意図に関する覚書——結びにかえて——

『発心集』序には対他的編纂意図が認められないこと、それと同傾向を示すものに『閑居友』『撰集抄』があることは既に述べた。桑原氏の御指摘にもあるように、⁽¹⁷⁾それらが『発心集』序の影響を受けていた可能性は強い。しかし、『閑居友』下巻第十一話末尾の跋文風の文章を見ると、本書が実は他からの要請の下に成立したことが判明する。その文章とは以下の通りである。

そもこの書二巻を記しそめ侍しかど、言葉つたなく、心みじかきものゆゑ、時もむなしくうつり、ひかげもいたづらにか

たぶけば、恥ぢてすゞりををさむといへども、藻塩草、かきあぐべきよし、かねてきこえさせければ、海人のぬれぎぬおもひみで、またふでとれるなるべし。ねがはくは、いつくしみのまなこのまへにをさめて、あはれみの心のほかにちらざされと也。

永井義憲氏は、この要請者を安嘉門院邦子か式乾門院利子かのどちらかであろうとされる。結局、『閑居友』も『三宝絵』と同様の成立事情を有していたことになる。また、現存『撰集抄』編者には、西行仮託という編纂上のねらいがあった。ここに至って、『発心集』序の編纂意図を果たして額面通り受け取っていいものか、長明をして『発心集』編纂に駆り立てた真のエネルギーは一体何であったのか、という疑念が当然生じてくる。当然と記したのは、編纂（執筆）意図などは一元的に捉え切れないものという前提がそこにあるからで、と同時に、わざわざ釈明を行った長明その人に、一種得体の知れなさとい筋繩ではいかな面を見るからである。

そこで、『発心集』に関する記事を載せている『閑居友』上巻第一話の評論部を手懸りに、『発心集』編纂意図について若干の臆説を述べてみたい。その評論部には次のような記事がある。

さても「発心集」には、伝記の中にある人々あまたみえ侍れど、この書には伝にのれる人をばいることなし。

①かつはかたぐはざかりも侍り。

②また世の中の人のならひは、わづかにおのれが狭く浅くものをみたるまゝに、「これはそれがしが記せるものの中にありし

事ぞかし」など、よにもたやすげにいふ人もあるべし。

③またもとより筆をとりてものを記せるもの心ざしは、我この事を記しとゞめずは、後の世の人いかでかこれをしるべき、と思よりはじまれるわざなるべし。さればこそ章安大師は、「この事もしおちなば将来もかなしむべし」とは書き給ふらめ。

④いはんやまた、ふるき人の心もたくみに詞もとのほりて記せらんをや、いまあやしげにひきなしたらむいかにとおぼえ侍。(中略)

長明は人の耳をもよろこばしめ、また結縁にもせむとてこそ伝のうちの人もものせけんを、世の人のさやうにはおもはで侍にならひて、かやうにもおもひ侍なるべし。

そもそも、『閑居友』の最初の執筆時期は建保四年(一一二六)と言われ、ちょうど長明の没年に当る。彼の死を契機に『閑居友』が起筆された可能性は強く、『閑居友』編者・慶政と長明および『発心集』との関係は頗る緊密であったようである。その慶政が先掲の文章において、『発心集』は往生伝などに所収された人々の話を多く採り入れているが、本書ではそれらを採録しない旨を明らかにし、その理由として四点(①~④)を挙げている。⁽¹⁹⁾その中の②は、自分が取り上げた人物の話に対する、既出の書物を引き合いに出しての他からの非難を回避するため、という理由である。これは現代流に言えば差し詰め著作権に関する問題で、実際『発心集』がそのよくな、告発被害にあつたことを教えてくれる。その反省から慶政

は同じ轍を踏むまいと決意したのであるが、更に興味深いのは、説話集編纂者のあるべき姿勢を説いた③の条である。それは新たに説話集を編む者にとっての理念であり、且つ彼に求められた使命的課題でもある。説話集流行の時代風潮をよく反映した『閑居友』のこの記述は、またそれだけ新しい話材の発掘・提供が渴望されていた証左ともなる。その点、『発心集』は期待外れであり、そればかりか不名誉な非難までも蒙つたことになる。確かに『発心集』には往生伝類や『本朝法華験記』に収められた話は少なくない。だが、長明もそのような非難を予期していなかったわけはあるまい。いや、むしろ鋭敏に察知した上で、未然に策を講じたのではなからうか。それが、他の誰のためでもない、我が発心のためにのみ、という表明となって表われたのではないかと考える。非常に穿った見方かもしれないが、案外、右の如き事情と序に示された編纂意図とが絡んでいるように私には思われる。

ところで、慶政によれば、長明には少なくとも二つの往生譚編述意図が存したことになる。それは先掲の(ア)であり、(イ)は『発心集』序の『こひねがふ縁』とする意図と重なる。しかし、人の耳を喜ばせるといふ(ア)の意図は序には見られない。ちなみに『閑居友』の起筆時期からして、『発心集』は成立後比較的早くから流布していたと推定され、あるいは長明存命時に既に読者を得ていたかもしれない。また、内容はどうであれ、相当なる反響がつと寄せられた事実は長明編纂の説話集が待望視されていたことも想像させる。以上

のような情況と『人の耳をもよろこばしめ』る意図とがもたらすものは何か。この解明は容易ではないが、ただ、『発心集』にも読者なり他者なりを強く意識した面、換言すれば奇をてらった部分があったとは指摘したい。(それとてごく一般的で自明の事だとも言えようが、敢えてこだわってみたい。)そのように考えることで、長明の道心とは直接関わりがないように思える多くの異相往生譚や不浄観説話などにも、その編述の意図を了解し得るのではなかるうか。

繰り返しになるが、長明自身は他への教化教訓の意図を否定している。これも全く無視することはできない。故に、むしろ注目すべきは、仏教説話集をあくまで己が立場で自分の仏道心のためにだけ編むという趣向にあり、その所産としての『発心集』を世に問おうとする意図が原動力として長明にあったと見たい。それは皮肉にも作家長明の世俗的誇示に他ならないのであるが。

長明が念頭に置いた読者層の想定については今後の課題とするが、例えば、出離解脱の方法論を展開する巻一からは長明や慶政と同じような、遁世者が予想される。大方の御批正を仰ぐ次第である。(昭和57年5月31日脱稿)

注

- 1 桑原博史氏「序のある文芸―採集抄の位置―」(『説話』四、昭47・12)。

- 2 中島悦次氏「宇治拾遺物語の「序」に沿うて」(『文学』昭9・5)、片寄正義氏「宇治拾遺物語序文考」(『今昔物語集の研究』上、昭18・12)参照。
- 3 本序が『太平記』三五・北野通夜物語に依拠していることは安藤直太郎氏「三国伝記の成立に関する考察―殊に沙石集・太平記との交渉について―」(『国語国文学研究』二、昭15・12)に詳しく論じられている。
- 4 第一種七卷本系板本(『大日本仏教全書』所収)には『沙門明春』の付した序がある。
- 5 片寄正義氏「冥報記と日本霊異記・今昔物語集」(『今昔物語集の研究』上、昭18・12)参照。
- 6 李儼には『金剛般若経集註序』(『唐文拾遺』一六所収)も存する。
- 7 『大正新修大藏經』本文には『於博記。所以……』とあるが、私に改めた。
- 8 書名は序最末尾の『我が一念の発心、を樂しむばかりにや』によるか。
- 9 木藤才藏氏「鴨長明における生と死―発心集と方丈記―」(『日本文学』二六八、昭50・10)には、巻一〜三成立後に序が執筆されたと推定されている。
- 10 『発心集』序にも『はかなく見る事、聞く事を註し集めつつ、しのびに座の右に置ける事あり。』という酷似した表

現が見られる。

11 青山克弥氏「『閑居友』の成立過程に関する一試論」

(『説話物語論集』創刊号、昭47・12)。

12 注1に同じ。

13 西尾光一氏「中世説話文学の形態と方法」(『中世説

話文学論』昭38・3)参照。

14 原田行造氏「鴨長明と心」(『金沢大学語学・文学研究』

一〇、昭55・2)には、この冒頭句と『方丈記』末尾の主
体的心・客体的心との関連付けがなされている。

15 日本思想大系『源信』所収の『往生要集』訓み下し文に

抛る。

16 茶田雅子氏「狂言綺語および狂言綺語観について」(『大

谷女子大国文』一一、昭56・3)には一覧表がある。

17 注1に同じ。

18 永井義憲氏、『古典文庫』所収解説。

19 小林保治氏「閑居友序説」(『早稲田大学教育学部学

術研究』一六、昭42・12)参照。

尚、本文引用に際し使用したテキストは以下の通りである。

『冥報記』『経律異相』『法苑珠林』—大正新修大藏経、『金

剛般若経集験記』—大日本統蔵経、『日本霊異記』『古今著聞

集』『沙石集』—日本古典文学大系、『日本往生極楽記』『往

生要集』—日本思想大系、『三宝絵』—『三宝絵略注』、『発

心集』—新潮日本古典集成、『閑居友』—中世の文学、『十訓
抄』『撰集抄』—岩波文庫、『私聚百因縁集』—大日本仏教全
書。また、旧漢字は現行の字体に改めた。

(付記)本稿を成すにあたり御指導を賜った稲賀敬二、位藤邦生両
先生に記してお礼申し上げます。

(高知大学助手)